

権力と歴史

——フリードリッヒ・ニーチェの
哲学を媒介として——

小寺隼豊

序論

本論の主題は、「権力」と「歴史」というふたつの領域にまたがる諸問題を、フリードリッヒ・ニーチェの哲学を媒介として、批判的に考察することである。

この権力と歴史の関係性は、とりわけ二十世紀後半から議論が交わされてきたテーマであるが、かような議論が生じてきた背景には第一に、近代に入り定式化された「主体」概念の成立を挙げることができる。さらに第二の要因として、そのような主体概念の成立のもと建設された近代国民国家が、おのれの政治権力の正当化をはかるため、正史というかたちで「歴史」を語り、利用し始めたことが挙げられる。以上のように権力と歴史をめぐる諸問題は、近代における主体概念と国民国家の成立と連動するかたちで、さかんに議論がなされるようになっていった。

とはいえ、筆者はこの権力と歴史をめぐる議論は、二十一世紀に入ったこんにちを批判的に分析するうえでも欠かすことのできない観点であると考えている。

たとえば、こんにち世界規模でおこなわれている市場経済・自由競争の状況にあって、わたしたちはいまや、国家という枠組みを超え出たかたち

優秀修士論文概要

での権力闘争にさらされている。他方、かような競争原理のもと生じる不安を処理するために、まさにグローバルゼーションの反作用として、ナショナリズムが台頭してくる。そのさい、国家が自国のナショナリズムの維持のためにおこなう、「歴史観修正」の動きが問題となっている。これら現代の諸状況をかんがみても、権力と歴史をめぐる問題をいまふたたび問い直す意義は十分にあるといえよう。

しかしながら、ここでひとつの疑念が生じるであろう。すなわち、以上のような諸問題に応えるために、なぜいまニーチェの哲学を取り上げるのかというものである。筆者はニーチェの哲学をここで取り上げる意義は次のふたつの点にあると考える。

第一に、本論は権力と歴史をめぐる問題を、近代以降の議論枠組みに制約されず、むしろ西洋文明全体を批判的に考察するような、ある射程の広さを保持しつつ論ずることを意図している。具体的には、プラトン・キリスト教以来の「形而上学」全体を、権力と歴史というふたつの観点にもとづいて、批判的に考察しようというのである。そのさい、ニーチェの哲学を取りあげることがはきわめて有効となる。というのも、ニーチェの形而上学批判はまさに、この権力と歴史というふたつの観点から実行されているからである。

第二の意義は、これまでのニーチェ解釈自体に内在する問題にかかわるものである。すなわち、二十世紀前半にハイデガーによって呈示された「西洋形而上学の完成 (Vollendung)」としてのニーチェ像にたいし、別のニーチェの可能性を模索していくために、いま一度ニーチェの権力と歴史をめぐる言説を吟味する必要があるのである。

本論では以上の論点を基軸としながら、ハイデガーの代表的なニーチェ論「ニーチェの言葉〈神は死んだ〉 (Nietzsches Wort: Gott ist tot)」と、ニーチェの代表的な著作『道徳の系譜学 (Zur Genealogie der Moral)』

二つのテキストの読解をおもにおこなっていくことにする。

第一章 過剰な「価値還元主義者」としてのニーチェ

―ハイデガー「ニーチェの言葉〈神は死んだ〉」より

本章の主題は、『拙道 (Holzwege)』に収録されている「ニーチェの言葉〈神は死んだ〉」の詳細な読解をおこなうことである。同論考はその主張の明確さや完成度の高さなどから、ハイデガーのニーチェ解釈のひとつの終着点としばしばみなされる。

同論考はまず、前半部と後半部で論旨を大きくふたつに分けて考えられる。前半部は「権力への意志」をニーチェの哲学の根本原理として位置づけることが試みられている。そのさい、それは「神は死んだ (Gott ist tot)」の意味説明を通じてなされる。それにはいし後半部では、「権力への意志の形而上学」と規定されたニーチェの哲学が、「近代形而上学の完成」であることが明るみにされる。ハイデガーのニーチェ解釈はこのように、まずニーチェの哲学を「権力への意志」を軸にして解釈しつつ、そのことよってニーチェを近代形而上学の完成者と結論づけるとい手法をとっている。

なおここで大別したふたつの論旨は、さらに詳細に整理できる。まず前半部で論じられる主要なファクターは、以下の四つである。それは、①「神」、②「ニヒリズム」、③「価値」、④「権力への意志」である。ハイデガーは、ニーチェのもちいるこれらの概念の意味を順に説明するかたちで、論を展開していく。この一連の意味説明を経ることよってはじめ、ニーチェの哲学を権力への意志の形而上学と位置づける、その正当性が裏づけられるにいたる。さらに後半部の論述は、ふたつに大きく分けられる。それは① 権力への意志の形而上学が、近代形而上学の「確知性

(Gewißheit)」を基礎づけるものであることを示すこと、②「権力への意志」に対応する人間類型としての「超人」を示すこと、このふたつである。本章では、以上で整理した論のポイントを順々におさえるしかたで、ハイデガーのニーチェ解釈を詳細に読解していった。

その結果、ハイデガーがニーチェの権力への意志を、近代主体概念に結びつけることよって、ニーチェの哲学を近代形而上学の本質たる「主体が基体であること (die Subjektivität des Subjekt)」の完成と位置づけるにいたったことが確認された。これにはいし、このように捉えられたニーチェの哲学はまさに、過剰な「価値還元主義」のごときものとして素描されている、というのが筆者の本章での最終的な結論となった。

以上のようにハイデガーによつて呈示されたニーチェの哲学においては、あらゆる存在者は定立された価値にもとづいて操作され処理される対象とみなされる。たしかにわたしたち現代人はいまや、グローバルゼーションのもとおこなわれる自由競争のただなかにあつて、ある任意の価値に依拠した評価の側から、みずからの存在を承認したり、了解したりしている。それはハイデガーがニーチェの権力への意志と対応するかたちで見出した、不断にみずからの裁量権の拡張をはかる新たな人間類型、つまり「超人」のありようとみごとに重なるのである。

第二章 価値還元不可能なものとしての歴史

―ニーチェ『道徳の系譜学』解説

本章の目的は『道徳の系譜学』の読解を通じて、ニーチェの「歴史」にたいする理解の内実を確認することにある。その遂行の意義はおもに、次のふたつの点に求められる。

第一の意義は、従来の権力論が前提にしてきたような、非歴史的な性格

をもつ、近代的主体概念にもとづく主体理解をいちど保留し、むしろそのような主体の同一性は、ある「来歴の語り」によって形成されるという、別の視点への移行をうながそうとする試みにある。

第二の意義は、前章で示された過剰な「価値還元主義者」としてのハイデガーのニーチェ解釈とは異なる、かれの哲学の新たな可能性を模索しようという試みにある。具体的にそれは、ニーチェのニヒリズム理解を再考するかたちで遂行される。

筆者はハイデガーがニーチェの提唱するニヒリズムを、つぎの三つのことが生起する「場」としてとらえていたと考える。第一にニヒリズムとは「超感性的な世界の定立の場」である。つまり感性的なものと超感性的なものを区分し、後者の優位のもと、前者がそれに担われ規定されてきた、一連の歴史的な運動の場である。第二にニヒリズムとは「最上諸価値の無価値化の場」である。つまりそれは超感性的な世界がその建設的な力を失う事態である。第三にニヒリズムとは「新しい価値定立の場」である。ニーチェは最上諸価値の無価値化というしかたで生じたニヒリズムを、まさにそのニヒリズムの徹底化による、新たな価値定立の原理によって克服しようとする。

以上ハイデガーにより抽出されたニーチェのニヒリズム解釈にもとづくならば、ニヒリズムとは、それが「超感性的なもの」に主導されるにせよ、「主体が基体であること」に主導されるにせよ、あくまで「超」歴史、あるいは「非」歴史的な視点によって支えられているところの歴史的な運動となる。しかし筆者はニヒリズムとむしろは、超歴史的な視点によって、ニーチェが系譜学の特長として語るところ「歴史的な精神 (der historische Geist)」を覆い隠してしまう事態を意味していると考ええる。

この歴史的な精神が問題となる領域は、実体的な歴史過程ではない。そうではなく、この歴史的な精神とは、歴史と呼ばれうる事象に携わる者の

態度やあり方を指していると考えられる。そのような精神のもとにあるものは、現在の意識や価値様式に抑圧され、隠蔽され、あるいは敗北している過去の価値様式を、まさにその現在に対抗する可能性として現在に呼び覚まそうとする。そのようにして呼び覚まされた歴史は、既存の権力にたいする一種の「解体力」として、みずからの本領を発揮する。ニーチェにとって歴史とは、かような解体力をもつものとして思索されていた、というのが筆者の本章での最終的な主張であった。

結論

権力と歴史という題目のもと、本論で論じてきたことは、筆者が現代を生きるなかで直面したさまざまな出来事に導かれて執筆されたものである。

第一章では、ハイデガーのニーチェ解釈に依拠して、新自由主義的イデオロギーのもと生きるわたしたちの生のありようを浮き彫りにした。それにたいし、第二章では、ニーチェの『道徳の系譜学』の読解を通じて、歴史が現在支配的な価値様式や、そのもとで構成される権力構造に対抗する可能性をもちあわせていることを指摘した。

現存在と存在論

——「生」と密接に関連した哲学の試み——

匂坂 亮

本稿の目的は、マルティン・ハイデガーの現存在分析を解明することにある。より具体的には、一九二〇年代後半における「基礎存在論」と「メタ存在論」構想を一貫した視座のもと見直し、そこにおいて現存在にいかなる位置が与えられているのかを明らかにする。さらにわれわれの「生」にとって現存在とはいかなるものであるのか、という問題に筆者独自の視点から回答を与える。上記二点が本稿の主題である。ハイデガーの現存在分析をいかに受容するかということは、哲学をどのように受け止めるかという問題につながる。それは必然的に、「哲学とはなにか」という問いを引き起こす重要な問題系なのである。

第一章 『存在と時間』における現存在の存在論

まず第一章では、『存在と時間』において表明された「基礎存在論」構想の概要を明らかにするとともに、そこにおける現存在の位置を明確化する。しかしながら同書を解説することは、一筋縄にはいかない。

解説の難解さにはさまざまな理由が考えられる。『存在と時間』刊行以前の講義において、ハイデガーは自身の哲学を「事実性（日常性）の解釈学」と名付けており、『存在と時間』はその延長線上にある。したがって、十全な理解のためにはこのような背景を考慮する必要があること。「基礎

存在論」として、従来の形而上学においておこなわれてきた存在論を批判するため、独自の術語を使用していること。その術語は、日常的なドイツ語の用法を踏まえつつも、新たな意味が付与されていること。分析の主題となっている当の現存在が、多層的な構造・多義的な意味のもと描かれているため、一義的には見定めることができないこと、等々。以上のような難点につきままとわれているのである。もちろんこの多層的で多義的な難解さこそが、『存在と時間』の魅力でもあり、さまざまなかたちで解釈され続けている理由でもある。

本章ではあくまで、『存在と時間』に焦点を絞り、「基礎存在論」構想を解明することに努める。「基礎存在論」構想に着目するメリットはいくつかあるが、本章は特につきぎのようなことに寄与することになる。それは、「メタ存在論」とのかかわり、もしくはそれへの変更という問題が、より見通しやすくなるということである。「メタ存在論」を適切に理解するためには、「基礎存在論」の十全な理解が不可欠である。したがって、『存在と時間』という書物において表明された「基礎存在論」という、ハイデガー独自の存在論において、現存在がどのような役割をはたしているかを見ること、が、まずもって必要なのである。

最初に、基礎存在論構想の基本的な理念を考察する。続いて、その出発点であるところの現存在分析を、「世界内存在」という根本体制にもとづいて見てゆく。最後に、現存在の存在である「気遣い」、およびその意味である「時間性」へと歩みを進め、『存在と時間』における現存在分析を、その全体の構造のもと解き明かす。

第二章 『形而上学の根本諸問題』における 現存在と存在論

第二章では、「メタ存在論」構想を踏まえ、『形而上学の根本諸概念』における現存在の問題を解説する。『論理学講義』『補遺』での「メタ存在論」構想を詳細に検討したのち、『形而上学の根本諸概念』での現存在の「根本気分」、および「世界」の問題をあつかう。これを通じ、存在論における現存在の優位を、『存在と時間』とは別の視点から考察する。

「メタ存在論」構想から見えてとれるのは、ハイデガーが「基礎存在論」構想を放棄していないということ、またそれを遂行するために必要とされる新たな試みである。メタ存在論構想を解釈することは、基礎存在論理解に大きな役割をもっているだけでなく、存在論における現存在の優位を解明するためにも不可欠である。

本章では、一九二八年夏学期講義『論理学の形而上学的始原諸根拠』において、メタ存在論がいかなる構想であるかの概要をつかむ。つぎに、目を向けるのは一九二九/三〇年冬学期講義『形而上学の根本諸概念』である。『論理学講義』の翌年におこなわれたこの講義は、メタ存在論構想が具体的な事象の分析のもと描かれている。それだけではない。この講義の主題として、まぎれもなく現存在分析がおこなわれているのである。この講義は、『存在と時間』にならび、存在論と現存在との関係、ならびに現存在の「生」ということを考えるのに、重要な意義をもっている。したがって、この講義を詳細に検討することは、本稿にとって非常に有意義である。さらに、『形而上学の根本諸概念』で扱われている二つの主題を順に検討してゆく。第一に現存在の根本気分の問題であり、第二に、現存在とそのほかの存在者との世界との関係という問題である。

第三章 現存在と存在論、そして生

最後の第三章では、それまでの『存在と時間』『形而上学の根本諸概念』を通じてなされた分析を照らし合わせ、ハイデガーが意図した存在論を見て取るとともに、その存在論において、なぜ現存在が格別な地位を与えられているのか、という問題を解釈する。このことをつうじて、現存在と生、また生と哲学がいかに密接な連関のもとにあるのかを、筆者独自の「生」から一つの結論へと導くことにする。

第一章、第二章において、それぞれ異なる観点から考察した現存在の姿をもとに、存在論において現存在がいかなる優位をもっているのかを解明する。さらにこのことは、われわれの「生」と現存在という問題につながる。たしかに現存在分析は、存在論において格別な地位が与えられている。ハイデガーによる具体的な事例を踏まえた構造分析も、たいへん説得力がある。しかしながら、はたしてわれわれは本当にそのような現存在なのだろうか。

この問いは、非西洋文化圏に住むわれわれ日本人にとっては、ことさらに問われなければならないものである。なぜなら、『存在と時間』は、ハイデガーによるプラトン、アリストテレスの「反復 (Wiederholung)」である。これによっておこなわれる伝統の解体構築が、ハイデガーにとって喫緊の課題であったのも、まずなによりそれが自身が属する伝統の問題であったからである。

というのも、ハイデガーの問題意識の出発点は、つねにかれが生きた時代状況への応答である。『存在と時間』では、当時の学全体の危機を感じ、その原因を存在の意味という根本基盤の確立によって解決しようとした。『形而上学の根本諸概念』では、「文化哲学」の蔓延とそれを求める現代人から根本気分としての退屈を分析の対象とした。それにとまなうさまさま

な存在者の世界分析は、当時の生物学のあらたな基礎づけを試みたものである。

これら当時の状況は、西洋に伝統的な学問によって生じたものであり、それを根本から、すなわち古代ギリシア哲学から問い直すことこそ、問題の解決であったのである。しかしながらわれわれ日本人はどうであろうか。当然のことながら、当時の時代状況も、西洋の伝統も「異国」のものであり、われわれ自身の伝統ではない。

ここから根本的な問いが生じる。はたしてハイデガーのテキストを読むことは、われわれにとってどのような意味をもつのであろうか。人間を現存在であると読み替えたハイデガーの分析は、その伝統に属さないわれわれにとつてどのような意味をもつのであろうか。またこの問いは、哲学とはなにかという問題ともかさなる。哲学とは存在論であるといったハイデガーのテキストを読むことは、われわれにとつて「他なるもの」の受容である。ここにもどのような意味があるのだろうか。

かくして、本稿の主題であるところの現存在分析の解明は、われわれにとつて「現存在」とはなにか、「哲学」とはなにか、という問いへと変貌するのである。本章では、第一章、第二章で解明されたハイデガーの足取りをもとに、現代の日本を生きる筆者の視点から暫定的な結論を出すことを試みる。

まず、これまで解明された現存在分析を総合し、ハイデガーの存在論において現存在とは、いかなる優位をもつのかを見てとる。すなわち、存在論における現存在の「中軸的意味」を解明する。次に、この「中軸的意味」をもとに、あらためて現存在の全体的構造を考察し直す。ここにおいて一九二〇年代後半のハイデガーの思想における、現存在という問題を見通しよくする。最後に、いよいよわれわれ日本人にとつて、「現存在」とはなにかという問題へと踏み込む。はたしてわれわれは、ハイデガーが緻密に

描き出したところの「現存在」であるのだろうか。それはわれわれの「生」とつて、どのような意味をもつのであろうか。

この問いに答えるために示唆的であるのは、『存在と時間』第一部第二篇第五章「時間性と歴史性」である。従来の研究においてこの章は、『存在と時間』全体の構造からして特異なものとみなされ、軽視されてきた。しかしながら、直前で解明された現存在の「時間性」をもとに展開される歴史解釈は、この時間性の具体化であり、現存在分析の頂点にある。

さらに『存在と時間』が、ハイデガーという現存在によって描かれたものであると考えるならば、「時間性と歴史性」章はハイデガー自身の態度表明であると考えられる。したがって、この章を解釈することは、ハイデガー自身の哲学にたいする姿勢を明らかにすることなのである。このハイデガーの姿勢は、そのままハイデガーのテキストを読むわれわれにも適用することができる。さらにそれは、われわれははたして現存在であるのかどうかという問いや、われわれにとつて哲学とはなにかという問いに答えるための手がかりでもある。